

特集 夢を染めあげる若者たち

生命の力強さを独自の世界に



命あるものの力強いうねりを表現した作品「伸」

仕事と作品づくりの両立

現在、1年に一回のペースで、市民ギャラリーで個展を開催している五反田大輔さん。福山市内にある印刷会社に勤務し、コンピュータによる画像処理を担当しています。気さくで愉快的先輩に囲まれ、和気あいあいとした雰囲気です。



上司の小田原功二・システム課長は「会社での仕事づくりのために、会社を犠牲にすることはありません。五反田君が有名になってくれたら、うれしいですね」と、今後の活躍に期待を寄せます。帰宅後と休日、制作に没頭できる貴重な時間です。作業場所は、自分の部屋とガレージを使います。

型染め
五反田大輔さん
(宮浦一丁目)

湿度が多いと、染めの乾きが悪くなり、色の仕上がりに影響します。せつかくの休日雨が雨だと、作業が予定どおりに進みません。そういうときは、読書や映画鑑賞で、気分転換することもあるそうです。

作風は黒と白

黒と白のコントラストの鮮やかさと、樹木と人体の組み合わせが、五反田さんの作品の特徴です。気に入った樹木のスケッチをして、作品の図柄に取り込んでいきます。染色の場合、技法や染料などによって、さまざまな風合いを出すことができますが、五反田さんは、黒と白しか使

いません。樹木と人体をからめて、生命力を最も強烈に表現できるのは、この二色の対比しかないと言います。

イラストを描くのが大好き

五反田さんが父親の転勤で、三原に引っ越して来たのは、小学校入学前です。少年時代に好きだった遊びは、メロンコやキックベースボール。小学校卒業まで、スイミングスクールに通い、中学校では3年間、バスケットボール部に所属しました。スポーツに打ち込む一方で、イラストを描くのも大好きでした。



元気いっぱいの少年時代

短大時代の運命の出会い

自宅から通学でき、オープンキャンパスの印象がよかったことから、進学先に選んだのは、広島市にある比治山大学短期大学部でした。短大時代は、五反田さんにとって、かけがえのないもの



特集 夢を染めあげる若者たち

作品の広がり期待



比治山大学短期大学部教授 寺田勝彦さん (広島市)

五反田君の作品は、木と人体というモチーフなので、「モノクロで」とアドバイスしました。自分の形を見つけるには、近道だと思ったからです。それを忠実に守ってくれています。グレーで濃淡を表現してみてもいいでしょう。そうして、作品に広がりや、ふくらみが出てくることを期待しています。



実習室で作品づくりに熱中していた短大時代



和歌山県でのスケッチから生まれ、初入賞作品となった「胎動」

になりました。
一つは染織との出会いです。下絵や型彫りなど、工程ごとに細かい作業を重ね、色を染めつけていく表現方法にひき込まれました。
二つめの出会いは、現在も親交のある寺田勝彦教授です。寺田教授は当時を振り返り、「初めて男子学生二人が私のクラスに入りました。一日中、二人で作業していた姿を覚えています。よく実習室で昼食をとっていました。二人がある日、サンマを焼いたときには、煙とにおいに閉口し、さすがに叱りましたよ」と、懐かしそうに笑顔で話してくれました。

れ陽の中の枝や太い幹が、強く生命力を訴えかけてくるように感じたのです。このときが、樹木を作品の中で表現したいと思った瞬間でした。
樹木を追いかけて
染織の勉強を続けるため、京都精華大学に編入した五反田さんは、制作に追われ、徹夜の日々もありました。また時間をみつければ、樹木のスケッチ旅行に出かけ、遠くは関東や東北地方まで巡りました。
四年次に制作した「胎動」は、公募展に初めて応募し、入賞した記念すべき作品になりました。

くりヒントを与えてくれた樹木があります。
市天然記念物に指定されている系碕神社のクスノキです。樹齢500年以上といわれ、どっしりとした根元や大きな枝が見る人を圧倒します。スケッチを始めると、時間がたつのも忘れてしまいます。
マイペースで
五反田さんの活動を支え、応援しているのが家族です。母の良子さんは「出品の締め切りのために、夜遅くまで作業していることもあり、基本的にはマイペースですね」と朗らかに話します。
「自分の好きな道に進ませてくれた両親には感謝しています。心配しながらも、見守ってくれています」と、少し照れくさそうに五反田さん。

「個展の開催と美術展への出品を目標に、制作を続けていきます。来年、開館する芸術文化センターも活用してみたいです。パワーとアイデアをわけてもらうために樹木のスケッチにも出かけたかったですね。屋久島の縄文杉はぜひ訪れたいです」と、五反田さんの夢は膨らみます。



新しい作品に取りかかったばかり。スケッチをもとにイメージを膨らませていきます

夢ひらくまちの実現に向けて



市民が文化交流のできる、拠点施設となる芸術文化センター

き届いた作業環境などの便利さよりも、本人が表現したいと思う意志や、支え合う人たちとの交流、海・山・空などの豊かな自然とともにあります。

来年秋には、芸術文化センターが開館します。芸術文化センターは、思いがこもった作品が、数多く展示され、鑑賞する人と作者が感動を分かち合える空間を提供します。

三原には今回紹介した三人をはじめ、陶芸や彫刻、絵画など、地道に文化活動を続けている人がたくさんいます。
三人を見てみると、作業場がない、作業部屋が狭い、天候に左右されるなど、作業に制約はありますが、それぞれが工夫をこらし、制作に取り組んでいます。行

その空間をみんなで作え、利用することにより、新たな「夢」が生まれます。一人でも多くの人が夢を持てるようになると、一人ひとりが輝きながら、幸せを実感でき、そこに活力が見いだされます。それはやがて、夢ひらくまちとなっていきます。

言葉のツボ



型染め
下絵を型彫りした型紙を使い、のり防染をして、染めあげていく技法。